

ビジュアル

日本の音楽の歴史 全3巻



[監修] 徳丸吉彦 お茶の水女子大学名誉教授・聖徳大学名誉教授 B5判上製/カバー装 平均72頁

【第1回記本】 ① 古代～中世 [著] 奥山けい子/黒川真理恵/野川美穂子
定価: 本体2,800円+税 ISBN978-4-8433-6356-0 C0673 2023年4月刊行予定

【第2回記本】 ② 近世 [著] 小塩さとみ/野川美穂子
定価: 本体2,800円+税 ISBN978-4-8433-6357-7 C0673 2023年5月刊行予定

【第3回記本】 ③ 近代～現代 [著] 塚原康子
定価: 本体2,800円+税 ISBN978-4-8433-6358-4 C0673 2023年6月刊行予定

●揃定価: 本体8,400円+税
ISBN978-4-8433-6355-3 C0673

2023年4月刊行開始

執筆者 ①古代～中世: 奥山けい子(世田谷区生涯大学講師)/黒川真理恵(お茶の水女子大学他非常勤講師)/野川美穂子(東京藝術大学他非常勤講師) ②近世: 小塩さとみ(宮城教育大学教授)/野川美穂子 ③近代～現代: 塚原康子(東京藝術大学教授)

本書の特色

- 日本人と音楽とのかかわりの歴史を豊富な写真や図版をまじえオールカラーで解説。
- 銅鐸や鐘なども含む多様な楽器を、音が鳴る原理や演奏の仕方とともに紹介。
- 記譜法や楽譜の歴史など、音楽伝承の方法と技術についても解説します。
- 国際的な文化交流を通して人びとが聴いた、キリシタン音楽や朝鮮通信使の音楽、アイヌや琉球の音楽なども取り上げます。
- 図書館はもちろん伝統音楽・和楽器の指導者の方、学習者の方をはじめ、日本の伝統文化を広く知りたい方にもお薦めします。

※表紙写真: (上) 春日権現記 第2軸(部分・板橋貫雄模写・国立国会デジタルコレクション) / (下): 笙(宮内庁楽部蔵・若林直樹撮影/吉川英史監修「図説 日本の楽器」(東京書籍 1992年)より転載)

関連企画のご案内

ビジュアル 日本のお金の歴史 全3巻 井上正夫/岩橋 勝/草野正裕 著 B5判上製/オールカラー ●各巻定価: 本体2,500円+税 ISBN978-4-8433-4793-5 C0633

☆☆☆☆全国学校図書館協議会 第21回学校図書館出版賞受賞☆☆☆☆

ビジュアル 日本のお金の歴史 全3巻 梅原 淳 著 B5判上製/オールカラー ●各巻定価: 本体2,800円+税 ISBN978-4-8433-5118-5 C0665

ビジュアル 日本の服装の歴史 全3巻 増田美子 監修 B5判上製/オールカラー ●各巻定価: 本体2,800円+税 ISBN978-4-8433-5217-5 C0639

ビジュアル 日本の住まいの歴史 全4巻 小泉和子 監修 B5判上製/オールカラー ●各巻定価: 本体2,800円+税 ISBN978-4-8433-5485-8 C0639

ビジュアル 都道府県別 日本の地理と気候 全3巻 浅井建爾 著 B5判上製/オールカラー ●各巻定価: 本体2,800円+税 ISBN978-4-8433-5736-1 C0625

ゆまに書房 〒101-0047 東京都千代田区千代田2-7-6 TEL.03(5296)0491 FAX.03(5296)0493 http://www.yumani.co.jp/

ゆまに書房 Tel.03(5296)0491 / Fax.03(5296)0493		年	月	日
ご注文書	ビジュアル 日本のお金の歴史 全3巻		セット	
	揃定価: 本体8,400円+税 ISBN978-4-8433-6355-3 C0673			
	①古代～中世	定価: 本体2,800円+税 ISBN978-4-8433-6356-0 C0673	部	
	②近世	定価: 本体2,800円+税 ISBN978-4-8433-6357-7 C0673	部	
	③近代～現代	定価: 本体2,800円+税 ISBN978-4-8433-6358-4 C0673	部	
お名前				
ご住所		TEL ()		

※毎度ありがとうございます。お申し込みはぜひ当店へ。

日本の音楽の歴史

ビジュアル

◆監修◆ 徳丸吉彦
お茶の水女子大学名誉教授
聖徳大学名誉教授

全3巻

音楽でたどる、日本の文化。

ゆまに書房

3 古墳時代の音楽

「古墳時代」の定義にも諸説あります。ここでは、3世紀頃から6世紀末までと考えておきます。古墳時代は、「倭」とも呼ばれた日本の各地の権力者が連合し、中国や朝鮮半島の国に対抗しつつ交流して、「王君」を中心とする「ヤマト王権」が生まれた時代です。この時代にも書記伝承はありませんが、のちに書かれた歴史書の情報によって、考古学的な遺物からは知り得ない歌や舞、音楽の役割などを推測することが可能です。

奈良時代に書かれた『古事記』（712年成立）と『日本書紀』（720年成立）には、神代の時代

される倭国の話にもあります。『古事記』上巻には、天照大神（天照大神）が隠れている天の石屋の前で、天手彦命が足を踏みならして歌舞したという話があり、これは日本における芸能起源の神話とされています。『古事記』上巻には、大国主神が素戔嗚尊を背負って逃げたときに天の沼琴を持ち出した話があり、この天の沼琴は、弥生・古墳時代の板作りの「こと」のように小型であったのかもしれない。神話ではなく古墳時代の情報と思われるものには、熊襲征伐の前に神功皇后が「こと」を用いて神託を得たという話（「古

事記」の「こと」や筑状弦楽器、鋸歯状木製品、刻骨、弓形角製品に加え、縄文時代とは異なるタイプの土鈴、馬鐸、金属の鈴などが出土しています。楽器を象ったミニチュアの土製品や埴輪などもあります。

馬鐸は馬に吊るす金属製（多くは青銅）のベルで、内側に舌があり、馬が歩くと音を鳴らしました。馬には金属製の鈴（馬鈴）も吊るされました。内部に小石を入れ、揺れると音が鳴る仕組みの金属製の鈴は、人間の装身具としても使われました（図12）。馬であれ人であれ、金属の響きを身にまとう存在に、人々は畏敬の念を抱いたことなのでしょう。古墳時代の土鈴は金属製の鈴を象った土製品で、金属の鈴を作るときに必要なスリット（細長い溝）の形を真似しています。

静岡県磐田市の明ヶ島古墳群からは、人間、動物、武器、農耕具などを象ったミニチュア土製品とともに、板作りや槽作りの「こと」、筑状弦楽器、笛を象ったミニチュアの楽器の土製品が出土しています（図16）。これらの土製品は、祭祀に使われたと推測されています。

弥生時代や古墳時代の「こと」には、弦をもちあげるブリッジ（「こと柱」）があり、その遺物も出土しています（図13）。木製のものに加え、翡翠製のものも出土しています。楽器本体とは別に出土する例が多く、神事のための特別な存在であった「こと」と同様に、「こと柱」単体でも神格化されていた可能性が指摘されています。

古墳のまわりに並べられた埴輪には、楽器を演奏する姿を象るものもあります。それらは、出土した楽器の遺物がどのように演奏されたかを教えてくれる資料です。「こと」を演奏する姿の埴輪は男子像で、福島県や関東か



図14 「こと」を弾く男子像の埴輪（千葉県芝山町殿部田1号墳 芝山仁王尊観音経寺）



図15 太鼓を打つ男子像の埴輪（群馬県天神山古墳 東京国立博物館）

音楽でたどる 日本の文化 日本人と音楽のかかわりを豊富な写真や図版で解説します。

ビジュアル 日本の音楽の歴史 組見本 (70%~75%に縮小)

※後図版：江戸時代後期のおさらい会（部分『歌曲時習考』文化2年版・個人蔵）

●多様な楽器を音が鳴る原理や演奏の仕方とともに紹介。

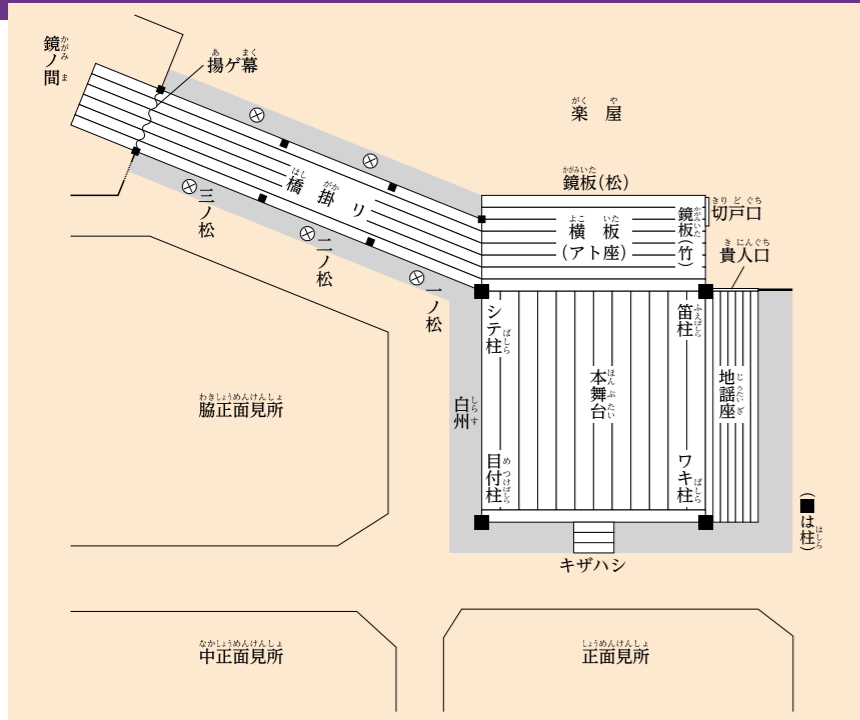


図110 能舞台の名称

専門それぞれに流儀があります。たとえばシテ方は観世流、宝生流、金春流、金剛流、喜多流の5流で、ワキ方は宝生流、福王流、高安流の3流、狂言方は大蔵流、和泉流の2流です。

能舞台

楽劇を成り立たせるためには、舞台装置や小道具、扮装のような視覚的要素も重要です。能楽堂の中心に能舞台があります。木造で幕がなく、三間四方の本舞台は柱4本で囲まれ、屋根が付き、白州で囲まれています（図109・図110）。

本舞台につながる廊下は橋掛りと言ひ、演者の入退場や演出の工夫に使われます。観客

が座る見所（けんじょ）は、本舞台の正面から脇まであり、広く見通すことができ、舞台との距離が近いです。能舞台と見所は独特の雰囲気を持つ空間です。

舞台正面の鏡板には大きな松が描かれ、舞台によってさまざまな形が見られます。

本舞台の奥の横板（アト座）には楽器奏者＝囃子方が座り、地謡座に地謡が座って伴奏します。

橋掛り前面の若松3本は演技の標識となり、大きさに差があって、遠近感を表します。橋掛りの突き当たりには幕があり、奥に鏡ノ間という板の間があって大きな鏡が備えてあり、ここで役者が能面をつけたり、囃子方が「調べ」を演奏したりします。



図127 笛

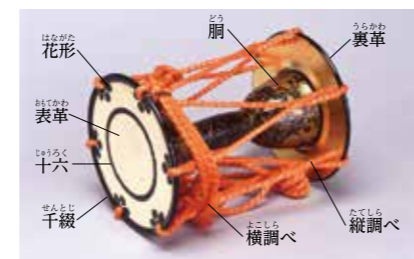


図128 小鼓

2枚を当て、麻の調緒を、多少のゆとりを持たせて締め（縦調べ）、縦調べとはほぼ直角に横調べを巻いて結びます。右肩に上げて右手で打ち、多様な音色を生み出します。音高と音色を調節するために、左手で調べを締めたりゆるめたりして革の張力を加減し、手指のあ



図129 小鼓を組むところ

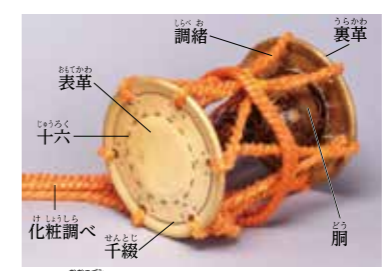


図130 大鼓



図131 大鼓の皮を焙じる



図132 大鼓を打つ

たる位置や強さ、打つ指の本数を変え、数種の打音を打ち分けます。和紙（調子紙）をちぎって裏革の表面につばでつけて振動を整え、演奏中に調子紙を濡らしたり、革に息をかけたたりして湿度を保ち、音色を整えます。調整のため裏革の裏面にも調子紙を貼ることがあります。

大鼓

大鼓は小鼓より大きく、おおかわ（大鼓、大革）、だい（大）とも言います。中央が細い桜材の胴に、馬皮を鉄輪に張った革2枚を当て、麻の調緒で締めます。胴の中央に鐙という飾り彫りがあり、革に漆を塗らないことが、小鼓と違う点です。

基本の拍を中心に刻み、囃子の進行のサインを打ち出す役目をします。演奏前に革を炭火で焙じて乾燥させ、調緒で強く締め上げ、さらに小締メという緒で調緒を締めて、上から化粧調（胴縄とも）という緒をかけて飾ります。このようにして硬く激しい音色が生まれます。指を保護するために「指革」という和紙製のサックをはめることが多いです。左膝に載せて右手で打ちます。

太鼓

太鼓は撥で打つ両面の締太鼓で、革は牛皮で縁は鉄輪です。革の表面中央に撥皮、裏面中央に裏張りを張ります。胴は短く、材はケヤキを最上とします。胴に革2枚を当て、麻の調緒できつく締め上げ、さらに横調べを巻きます。これを台に載せ、両手の撥で打ちます。打音は数種あり、そのうち肩ノ撥は、左手の撥を右肩に上げてから強く打ちおろす粒です。

能の上演の前に、打楽器の奏者は道具を組んで準備します。囃子方は開演直前に「鏡の間」で短い楽曲「調べ」を演奏します。笛、小鼓、大鼓、そして太鼓のある曲では太鼓の順に音を発します。音は見所に聞こえ、観客の気持ちも整っていきます。



図133 太鼓

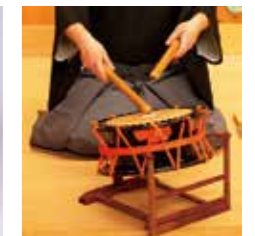


図134 太鼓を打つ

●記譜法や楽譜の歴史など音楽伝承の方法と技術を解説。

●舞台芸術も取り入れて学校の先生の授業の参考になるように編集。